物語理解に含まれる一般的言語的コミュニケーションの原型について(I)

小　島　康　次

1. 序　　論

今，なぜ「物語理解研究」か，というのは一時の物語理解研究ブームが去った様相を呈している昨今，それほど当り前のことではないようである。けれども，それ故に決りきったイメージではなく，新たな内容を盛り込み得る好い機会かも知れないとも思う。

筆者はピアジェシャンとして自らを位置付けているが，ピアジェが最も不得手とし，足を踏み入れたがらなかった領域に大きな関心を寄せるものである。奇を衒う訳ではないし，天邪鬼を決め込むのでもないが，教条主義的ピアジェ主義者ででもなければそれほど不自然なことではないであろう。

そうした領域は少なくとも二つある。「言語」と「感情」がそれである。ピアジェの批判者からすれば，それらは格好の批判材料でもあろう。そうした「ないものねだり」的批判も一つの重要な立場を形成しうるであろうけれども，むしろ，それはピアジェ理論とは何の関係もない理論構成とならざるをえないのではないか，と筆者は疑っている（詳しくは小島（1987a）参照)。

しかし，だからと言って，「言語」や「感情」の問題をすぐにピアジェ理論の文脈に当てはめるというのは多分もっとも愚かなやり方であろう（従って，私はサンクレール (Sinclair, H.) やコールバーグ (Kohlberg, L.) を一般に評価されているほどは評価していない)。最善かどうかは別として，ピアジェ理論のエッセンスを抽き出し，「言語」や「感情」の問題を考えるというのが適当な方法であると考えられる。結果的に，というより必然的にピアジェ理論とはやや違った新たな理論化が必要となるのである。この理論化の方向はヴィゴツキー (Vygotzky, L.S.) のものと似たものになるのは止むを得ない。また，それはフロイト (Freud, S.) の理論との統合という途轍もない話に発展する可能性を含んでいる（4.1 参照)。

まず，ピアジェ理論のエッセンスをどのようなものとして捉えるかを簡単に述べ，なぜ今「物語理解研究」なのかということ，また，それがピアジェ理論とどのように係わるのかということをみていこう。

2. ピアジェ理論をどのように捉えるか

ピアジェ理論のエッセンスをどのようなものとして捉えるか，この点についてここでは「物語理解研究」との係わりを特に意識せずに，思いつくままに挙げてみよう。その上で，物語理解研究との係わりについて若干のコメントを付加えよう。

まず第一に，「発生的見方」を挙げるべきであろう。詳細は後に譲るが，進化論が重要な理論的背景となっていることは指摘するまでもない。ただ，進化論と一口に言ってもそれが確定した一枚岩の理論でないことは，他の多くの理論に一般に見られる現象と同様であり，進化論をどのような理論として捉えるかと言うこと自体，ピアジェの発生的見方がどのようなものであるかを知るキー・ポイントになるであろう。物語理解研究との係わりは一見全く無いように

見える。しかし，後で述べるように進化論を捉え直す視点として，目的論や擬人論の復権を考える時，物語性ということが単なる伝承の形式以上の意味をもってくる。

第二に，「構造主義的見方」が挙げられるだろう。構造主義も進化論以上に様々な亜種，変種を含んだアプローチで，単一の理論と言うよりも一つの壮大な知的運動と言う方が近いであろう。しかも既にその運動をさえ批判的に乗越えようとする動きすら無視できない状況にある（例えば，浅田（1983））。従って，構造主義をどのように捉えるかということは，進化論におけるよりも遥かに難しい問題を含んでいることは容易に想像できる。ピアジェ理論の構造主義的側面については，レヴィ＝ストロースとの比較において論じたガードナー (Gardner, H. (1972) [1975]) が大いに参考になる。物語理解との係わりは，むしろレヴィ＝ストロースの方が強い訳だが，両者の所説は統合されねばならず，ロマン・ヤコブソン (Roman Jakobson) の構造的見方と発生的見方の融合の可能性を示す所説（特に，ヤコブソン（1960）は音韻論をこえてコミュニケーションの発達をも扱っている）が有望である。その点でピアジェ理論の中の有力なコンセプトは「遊び」である，と筆者は考えている。

第三に，「システム論的見方」が挙げられる。フォン・ベルタランフィ (von Bertalanffy, L.) によって提唱されたシステム理論がピアジェ理論にどの程度影響を及ぼしているかは必ずしも明確でない。けれども，人間の認識能力を科学史的並びに個体発達的な『知的システム』として位置付けていることはほぼ間違いなかろう。ただ，物語理解との関連では，それをコミュニケーションの基礎的過程として見る観点からすれば一般システム理論を社会科学的に捉え直したニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann) の諸分析（例えば，ルーマン（1974）[1984]）が重要な手掛かりを与えてくれるであろう。

第四に，「相互作用的見方」を挙げておこうと思う。これは独立な項目として挙げるべきではないかもしれないが，上記の三項目に準ずる基本的な見方として見ることに異論はないであろう。この中にはフィードバックや自己制御などの諸問題も含まれてくると考えられる。物語理解と直接係わるのは恐らくイーザー (Izar, W. (1976) [1982]) のテクストと読者の相互作用という考え方であろう。これは，ピアジェの相互作用説（物理世界との）を社会的相互作用へ結びつける懸け橋になるものと期待できる。なぜなら，テクストというのは現実世界とは異なる一つの世界であると同時に，現実世界を解釈する一つのモデルであると言うことが出来るからである。そこでは作者と読者が，真の社会的相互作用からすれば少しいびつな（部分的にダイナミズムを欠いた）相互作用をおこなっているとみることができよう。

以上，脈絡を欠いた羅列に過ぎないが，正に思いつくままに挙げて見た。

3. 「物語」について—構造主義的見方と相互作用的見方

3.0 概説

「物語」というものが言語と感情に係わって，二つの側面をもつものである点をまず指摘しておこう。それは，民族あるいは文化という，より多くの人間が係わった個人を超えたレベルの伝承と発展という側面と，同時にそれが具体的に伝わるのは個人の理解という，個人の認知構造，性格，境遇，経験などに多く依存したレベルで起こる出来事であるという性格の二面性である。

多分ほとんどどの民族にも見られる神話や民話のような伝承文学としての物語は，信仰とも深く係わるもので，多くの文化，民族に共通したテーマやストーリーがみられる反面，その文化，民族に独特な内容も含まれているというのが一般的な姿であろう。いづれにしてもそこに描かれている事柄は，如何にそれが特異な出来事であろうと，その文化，民族の多くの構成員

によって意義を認められる内容を含んでいると考えられる。それは何も伝承文学に限らず，その時代時代に見られる文学の大部分に当てはまる事である。(ただし，「本」という形で出版された物，しかも児童を対象とした物語の本となると，それは意外に短い歴史しかないのであるが（アザール (Hazard, P.) (1932) [1957])，その事自体はさして重要な問題ではないだろう。)

それは同時に，個人の理解レベルを通じてしか伝承されない訳で，口承の場合は勿論のこと，文字に残された場合でも「註解」という形でその時代，あるいは個人の異なった理解の仕方が示されるのである。このことについては後で，「テクストと読者の相互作用的見方」（イーザー (1976) [1982] 参照）の問題としてもう少し詳しく論じることになろう。

ここで指摘した二面性は陳腐なものでしかないかも知れないが，実際にはもっと重要な物語の性格に連なる問題を内包していると考えられる。それは後で詳しく述べるように，ピアジェ理論のエッセンスの一つに数えられた「構造主義的見方」と無縁ではない。それはまた，もう一つのエッセンスであり，個人レベルの理解の所で先に触れたテクストと読者の「相互作用的見方」にも係わってこざるを得ない。ここでは，極く簡単にその点を踏まえた議論をしておこう。

3.1　物語性と構造主義的見方

物語ということがいわゆる構造主義的見方の中でどのように位置付けられるのか。まずこのことを検討してみよう。

勿論いわゆる構造主義のテキスト的書物（ex. ファージュ (Fages, J.-B.) (1968)「1972」）に説明を求めるという手も無い訳ではない。しかし，物語性を構造主義的に特徴づけるキー・ワードから手掛りを得るやり方を採ることにしよう。ここでは山口昌男（1983）が指摘するように文学研究における「異化」概念の重要性の議論を参考にしながら，日常性に根ざす伝達の言語に対して詩的言語としての物語の特徴について述べることにする。

その骨子を極く短い言葉で言うならば，物語というのは人間が日常性の反復から脱出しようとする際の創造性（劇性）表現の一形式である，ということになろうか。そこで日常性からの脱出のメカニズムが問題になるだろう。それをさし示す適当な概念として山口（1983）はロシア・フォルマリズムの美学理論の中心概念である「異化」という用語をもってくる。

日常生活には，その秩序を構成する「らしさ」という規範があり，それは記号学的に「無徴性（徴なし）」と呼ばれ，それが普段の大多数の自動化された表層のコミュニケーションをつかさどっている。つまり，大部分のコミュニケーションはピアジェ流に言えば「同化」メカニズムによって遂行されていると言えようか。それも殆ど無意識に。それに対して「異化」はそうした規範による抑圧的な日常を「簡単には同化させない」作業によって意識化させる。言い換えればそれは，およそ予想できないようなものを組合せて見せることであり，日常の自動化されたコンテクストからもぎ取った意味を衝突させることであるということになる。

山口（1983）の議論はむしろ文学研究の概念であった「異化」をより広く文化人類学研究に適用可能であることを示すためのものであるが，ここでは物語性創出のメカニズムとして参考にさせてもらった。

3.2　物語性と相互作用的見方

イーザーの『行為としての読書』（轡田収訳）には科学論における新たな潮流である，新科学哲学の主張と同型的な視点の転換が，文学においてもあり得ることが示されている。ハンソン (Hanson, N.R.) に始まり，クーン (Kuhn, T.)，ファイヤアーベント (Feyerabend, P.K.) に至るいわゆる新科学哲学では，科学史の見方の連続性，客観性が否定され，その時代の科学的発見には，その時代の要求，制約が複雑に絡み合った形で起こるのであって，それが一定の客観的法則によって，次の時代の科学へと連続的に発展するというようなものではないことが

明らかにされたと思われる。

では，文学においてはそれと同様の動きはどのように捉えられるであろうか。それは，テクストとしての文学作品の解釈というものが，時代や文化を超越しては有り得ないということとして定式化できるであろう。つまり，作品は客観的に存在するのではなく，常にその時代の読者とのインターラクションによってその意味的な解釈を付与されるものなのである。

このインターラクションについてイーザーは次のように述べている。読書はテクストに導かれる行為だが，この行為を通じて，読者によるテクスト加工が，加工を行なう読者にフィードバック効果を及ぼす，これをここで相互作用 (interaction) ということにするが，この相互作用の記述は容易ではない，と。そこでイーザーはまず，相互作用一般を規定する条件を提示し，読書過程における相互作用の条件とそれとの相違点，共通点を明らかにしていこうとする。この一般的相互作用のモデルは社会心理学および心理分析的コミュニケーション理論に求められる。特に社会心理学の分野でジョーンズ (Jones, E.E.) とジェラード (Gerard, H.B.) が相互作用理論の出発点とした「偶発性」の（4つの）分類を検討することによって，相互作用の一般的特徴（構成および分化の条件）を「予測の不可能性」に帰着させることができるとする。

偶発性とは，互に独自の行動プランをもつもの同士が，その相手の行動プランを知らずに相互作用することによって起こる一種の「不確定性」であると言ってもよいだろう。もし互に相手の行動プランが正確に予測できる状況があるとすれば，それは芝居を演じる者同士がセリフを言合うような場合であって，本当の相互作用とは言い難い。また，逆に相手の行動や発言に対して一々その場限りの反応をするような状況があるとすれば，それも相互作用とは言えないであろう。相互作用とは，互に自分の行動プランに従いながら相手の反応にも，自分の反応を合せようとする努力がなされる状況で起こるものである。

従って，偶発性は相互作用から発生するものであると同時にそうした意味での相互作用を推進する原動力としての役割を果すものと考えられるのである。

精神分析の立場からのコミュニケーション理論においても，レイン (Laing, R.D.) によって次の様な指摘がなされているという。（対人的な）経験というものは，自分自身に対する見方，他者に対する見方のほかに，自分を他者がどのように見ているかということに対する自分自身の見方も含んでいる。この最後の見方は実際には経験不可能なことからであり，推測にならざるをえない訳だが，行動に際してはそれが顧慮されている，とする。レインはこの「経験」について，さらに次のように述べている。この経験は，互に見ることのできないものである。自分の経験は他者には見えないし，他者の経験は自分には見えない，我々は互に見ることのできない「経験」を対人関係の基盤にしている，と。そして，彼はこの見えない基盤のことを“空白”と呼んでいる。対人関係はこの空白を補塡することで成立つというのである。この空白の補塡の仕方は必ずしも決ったやり方がある訳ではなく，時として病理学的な様相を呈することもよく知られている。それについてはレイン（1970）において，正にその内容を示す『結ぼれ』（村上光彦訳）というタイトルで，ジャックとジルの相互作用の‘もつれ’が，あたかも一編の詩のように表現されている。

さて，このような一般的な相互作用モデルと読書におけるテクストと読者の相互作用との間にはどのような相違点，共通点があるだろうか。

まず決定的に違う点は，社会的相互作用に伴う対面状況 (face to face situation) が読書の場合にはないということ。つまり，対人的相互作用の場合のように，相手がこちらに調子を合せてくれることは期待できない。偶発性について予め抱いていた予測を確認するということも，対面状況にある対人的相互作用の場合は可能であるが，読書では不可能である。また，対人関係では，相手との対話は特定の目的を持っており，それが相互作用の背景的な文脈となり，相

手の反応を理解する上での重要な手掛かりとなる。一方，テクストと読者の間にはそのような準拠枠は存在しない。テクストの中にみられるコードは相互作用を調整する機能を失っているという。つまり，テクストと読者の間には対人的相互作用に遍くみられた目的も条件も欠けているというのである。

しかし，そうした目的と条件の欠如こそテクストと読者の相互作用を喚起する契機でもある。なぜなら，そうした欠如も一種の‘空白’と捉えられるからである。共通な状況や準拠枠の欠如は，対人的相互作用の契機である偶発性，空白（不確定性）に対応するものと考えられるのである。この空白はテクストと読者の間の場合，非対称的な関係における不均衡によって生じる訳だが，対人的相互作用のような対称的関係との相違は単なる形式上のものに過ぎない。

このような不均衡は対人関係の場合と同様，空白の補塡によって均衡化され，不確定性は確定される。対人関係と異なるのは，先に挙げたような非対称性のために，つねに読者の側からの投影が必須だということである。ここでいう投影 (projection) とは，イーザー（1982）がゴムブリチ (Gombrich, E.H.) に依って定義したように「テクストにある記号関係を読み解く行為に基づいてテクストに与えられる意味」と考えておこう。しかし，いくら読者が空白を補塡すべく投影を行なっても当然のことながらテクストに変化が起こるわけではない。かといって，読者の投影が何の抵抗もなくテクストに重ね合わされる場合も，対人関係の場合同様相互作用は成立しない。テクストと読者の関係が成立するのは，読者の側の投影に変化が起こる場合を置いて他にないのである。テクストは読者の想像力を絶えずかき立てながら，それによって共通な状況，即ち均衡化の状態へと向かうのであるが，テクストはそう簡単に決定的な解釈を許さない。読者の想像は次々と矯正されながら，徐々に共通の状況の準拠枠を作り上げる。

そして佳い物語とは，上記のような作業の結果として読者によって構成された意味が既存の準拠枠内の意味構造を問題化し，従来の規範を相対化する一種の支配力を読者にたいしてもつものであろう。

4. 「物語理解」における二面性

4.0 概説

「物語理解」としてみた場合にももう一つの二面性が見られる。それは，領域特殊な極く限られた時間空間的設定の中で起こる出来事を理解するという側面と，もっと一般性をもった，人間の知識のコミュニケーション的性質を我々に理解させる役割を持つものであるという側面の二つである。この後者は更に，物語によって，それを意図的に伝えている側面と，本来我々の理解が何等かの意味で物語的であるかも知れないという（無意識的であるが）きわどい側面の両方を含むものと考えられるのである。

特に，人間の理解が本来物語的であるという考え方は，ある意味でデカルト以来の因果論的世界観の絶対優位を否定する契機ともなり得る点で，一種の危険思想とも見られる。即ち，我々の世界観の本質を「目的論的」であるとし，自己と現実との関係を「脱擬人化」することの不可能性を説くシュペーマンとレーヴ (Spaemann, R. & Low, R. (1981) [1987]) の所説がその基礎となる。しかし，この点にこそ物語理解を「言語」と「感情」の問題を扱う土俵と見るべき根拠が含まれていると思われるのである。

思考の基本的な素材は恐らくピアジェが指摘している通り，下等動物との連続性を十分予想させる“操作”の様なものであったとしても，それが（人類において）言語表現や感情表現を発達させる時点では，記憶にしても，思考にしても伝達（コミュニケーション）ということを抜きには考えられなくなったと思われるからであり，しかもその基本的な形式は人間同士の営

みから生じたものである以上，擬人的にならざるを得ない。特に「言語」においてそれがあからさまになるのは言うまでもない。

この点からみると，ピアジェの「操作」の前提とされた外界との相互作用も，ピアジェが主に扱った物理的世界との相互作用よりむしろ対人的相互作用（あるいは社会的相互作用）の方にウェイトがかかる事になる。

それではピアジェ理論とは似ても似つかないではないかと思われるかも知れない。確かにその通りである。元々言語なしの認知操作が主体であった「思考」と，コミュニケーションの道具として発達した「言語」が合体して，精神活動の基本構造が出現するという考え方はヴィゴツキー（1934［1963］）の所説その物ではないか，それもその通りである。しかし，筆者はここで敢えてピアジェ理論を批判的に発展させていくという道筋をとって新たな理論の構築を試みたい。それが結果的にヴィゴツキーの所説と酷似したものになることは一向に構わない（似た所はあっても，かなり違った物になるとは予想されるが）。

なぜかというと，ピアジェ理論は多くの重要な問題を捨象している反面，否そのような犠牲を払って理論の高い完成度を達成しているように思われるからである。その詳細にここでは立入らないが，ピアジェ理論のパースペクティヴを吟味し，ある意味で解体しながら新たな理論構築のモデルを模索する意義は大きいと考える。

言語は，確かにコミュニケーションと思考の両機能を備えた記号体系であるが，系統発生的にはピアジェのいう操作の構造に依存していると見られるだろう。ただし，個体発生的には最早操作の構造とはさほど強い依存関係がなく，チョムスキーの言うように，生得的な構造として見た方がよいし，ヤコブソンの捉えたような構造の発達と見る方がより妥当であるかもしれない。

これらの諸点はピアジェの発達段階をどのように評価するかということとあいまって，まだ余りに多くの議論の余地を残したままである（小島 (1987b) 参照）。しかし，ここでは一応ピアジェがほとんど唯一の基本的要素と考えた「操作」を，それによってある程度独立した機能と構造を有するようになった体系（例えば「言語」）を構成する“単位”で近似的に置き換えてもよいと考えることにしよう。つまり，「論理－数学的」操作だけを基本的な単位と考えることを少なくとも個体発生のレベルでは修正して，「記号」にも生得的装置としての地位を与えることを許したいのである（小島 (1987b) 参照）。

さて，目的論とコミュニケーションとの関係については，従来の心理学的研究では全く不十分である。例えば，リファレンシャル・コミュニケーションの研究などがわずかにみられるが，とても真に重要な視点を提示しているとはいえない。メタ・コミュニケーションの問題にしても，どのように情報を提示すれば相手がこちらのメッセージを正しく受けとめるか，相手が「理解する」とはどのような状態なのかということに関する知識を調べるためには，リファレンシャル・コミュニケーションの研究で対象とされたモノの認知に関する伝達だけでなく，コト（出来事）の認知・記憶の伝達を材料にしなければ本質的な面が抜けた，歪んだ情報しか得られないだろう。それはまた，その出来事を伝えるべきコンテクストの欠如の問題にも繋がる。

そもそも「知識」には常に社会的側面が伴っているものと思われる。つまり，ある知識というのは，まず，それが出来事として起こり得る“世界”を同定することから始められなければならないからである。文法論－意味論よりも，語用論を軸にした見方（フォコニエ（1984）［1987］）を採るべきであるということでもあろうか。

（以下，次々号）